

狼三兄弟に
ノンストップ
溺愛はらま
セックスされて
番にされる話

がら堂 / どん丸

Attention

高校生を含む18歳未満は閲覧禁止です。

人目につくところでは読まないで下さい。

この話はフィクションです。実在の人物や団体とは一切関係がありません。

なお、この話は犯罪行為を助長するものではありません。決してマネしないでください。

本書の内容、テキスト、画像等の無断転載・無断使用を固く禁じます。

Unauthorized copying and replication of the contents of this book, text and images are strictly prohibited. 3

ストーリー／登場人物

国境にあるとある大衆向けの食堂は軍人や旅人達によく訪れる人気店である。そこで働く娘、メリーナは器量も愛想も普通だが、女っ気のない場所にいる飢えた男たちからはいつも狙われていた。なんとか男たちのギラギラした目から逃れてきたメリーナだが、ひよんなことから狼人三兄弟に目を付けられ……。

・メリーナ（主人公）

大衆食堂の看板娘。対人スキルはあまり高くはないが人は良い。

流されがち。

・グレン

狼人三兄弟の長男。黒髪金眼。195cm

いろいろとデカイ。寡黙であまり物も考えていない。

・フィン

狼人三兄弟の次男。金髪金眼。177cm

人当たりが良くいつもニコニコしているが性格はよろし

くない。

・アール

狼人三兄弟の末っ子。赤髪金眼。183cm

末っ子で甘やかされて育ったので俺様だが上二人がこれなので割と苦勞人。

体験版

「あ、あの、もう帰らなきゃ……」

「朝までいていいんだよ？」

「い、いや、帰りますっ……わっ！」

「ほら、フラフラしてる。お酒弱かったのかな？ こっちおいで」

黒髪のグレンと金髪のフィンと赤髪のアーク。三人兄弟らしい。

約束通り、私はお店を出た後、三人を宿に案内した。こ

の辺で過ごしていれば誰でも知っている宿屋だ。

道中フィンの話術に引き込まれ話が続いて気がついたら宿屋に連れ込まれていた。グレンはほぼ喋らずじっと私を見ていて、アールはたまに口を挟んでフィンに揶揄われていた。グレンはゴツくて顔に傷があるのでそうやってじっと見られると怖い。

流石にこれはやばいかも、と思ったがちよつと飲もうよとお酒を渡され、これだけ飲んだら帰ろう、とぐびびと飲んだら一気に頭がぼうつとした。獣人御用達の度数強めのお酒だったのだ。

本当にまずい、と帰ろうとしたが思った以上にお酒が回

ってしまったらしく、足元がふらつき、フィンに支えられて
ベッドに座らされる。

「あ、あの、わ、私っ……ひゃっ！」

「うまい」

「な、な、なにっ……やっ！」

「あは♡ やわらかいなあ」

「な、どこ触って、わあっ！」

「……もういいか」

「な、な、なにがっ」

べろん、と首筋に熱くぬめりとしたものが這ってつい高い声をあげてしまうと、それは横に来たアールの舌だった。

急にそんなことをされて目を剥いていると後ろに回ったフインに胸を揉まれ、足元に来たグレンが私の顔を見上げて大きな手で足に触れてくるから、嫌な予感しかしない。そして気づいた。

三人は今、肉食獣そのものの目つきをしている。

「きやあつ！ ま、まって、やつ……！」

蛇に睨まれた蛙というか、狼に睨まれた人間状態で（そのままだけど）呆然としていた私は、三人から手際良く服を剥かれてしまった。

ひ、と喉の奥を鳴らして腕で身体を隠そうとするが、六本の腕がそれを許してはくれない。

「や、やだ、見ないで、やだっ……!」

「かわいい」

「んっ……!」

耳元でフィンのはスキーな声で囁かれ、身体がびくりと反応してしまう。

三人は、私を喰らおうとしているのだ。

本当の意味で食べられる訳じゃなくて良かったと言うべきか。いや良くはない。絶対良くない。

「あっ……!」

「……………うまい」

「そ、そんなとこ、きたなっ……!」

「汚くない」

「や、やあっ……………！」

「きれいだ」

グレンに掴まれた足は持ち上げられ、大事なところが剥き出しになってしまふ。なんとかしなきゃと思っっているうちにグレンの顔がソコに近づいてきて、割れ目を熱いものがなぞった。それに身体は簡単に反応してしまふ。

強姦されそうになっているのに、私はなぜだか本気で嫌だと思ったり抵抗したりすることができないでいた。

「んあっ……………♡」

「……………エロ」

「ち、ちが、あつ、や、だめっ……ンンン♡」

「かわいい。声もつと聞かせて？」

「や、やだ、やだあ、あっあっ♡」

股の間からぐちゅぐちゅと聞くに堪えないやらしい音がして耳を塞ぎたくなるが、まだ腕は自由になっていない。

まだ時間にして数分と経っていないはずなのに、私の身体は早くも取り返しをつかないものになってきていた。

「も、やあつ……♡ ゆ、ゆるし、ゆるしてっ、ンあつ……♡」

「サービス、してくれるんでしょ？」

「こ、こういうのじゃな、いっっ！」

「ぢるる♡ アーロ、怪我させるなよ」

「甘噛みだ」

「ひ、あっっ♡」

この三人はもしや、血のつがった兄弟なのに穴兄弟にもなろうとしてるのか。意味がわからない。

そんなことを頭の奥で思いながら、自分でも驚くような甘い声が止まらない。

多少なりとも経験はあるけれど、こんなに頭も身体も翻弄されるのは初めてだから、尚のこと混乱する。

「な、なめるの、やだ、あっ……♡」

「こっちは喜んでる」

「ひ、よ、よろこんでなんか、あっ♡」

「こっちも無視しちゃだめだよ？」

「ひあんっ♡ や、やだあ、お、おねがい、むり、や、やあつ♡」

「あぐ、れろ♡」

「かむの、や、あ♡ あ♡ あ♡」

無理矢理開かされた足の間にグレンが顔を埋め、割れ目をペロペロと舐められている。ペロペロなんてかわいものじゃないけど。ぐちゅぐちゅというか、ぐちよぐちよというか。

もちろんこんなのがないのだからそれで耐え

られないのに、後ろにいるフィンからは胸を揉まれながら乳首をこりこりといじられ、横にいるアーロには肩を甘噛みされ舐められて、頭がおかしくなりそうだ。

ちよっとおかしなくらい身体が敏感になってしまい抵抗ができないのは、狼人三人が相手のせいなのか、お酒のせいなのか、この責め苦のせいなのか、もうわからなくなっていた。

「ちろ♡」

「あ！」

「……………ここか？」

割れ目を執拗に舐めていた舌が上に来て突起を掠り、

腰がびくりと跳ね頭に警報音のようなものがキンと鳴った。

「チロチロチロチロツ♡」

「あっあっあっあっ♡」

「おい、こっちも。ぢろろ……ぢゆぶぢゆぶ♡」

「ふああ♡ やっやっ♡」

「こっちも舐めてあげる♡」

グレンには淫核を、アールには耳を、フィンには胸の先端を舐られ、頭が沸騰する。

がくがくと震え始める太ももをグレンにぐっと押さえつけられ、足の指先まで力が入りピンと伸びる。やめてほし

くてグレンの頭を押そうとするが、ほとんど力の入らない手は硬めの髪を掻き分けることしかできない。チクチクとした髪の毛が手のひらに刺さる感覚にさえ感じていた。

「や、や、あっあっあっ♡ あツツ♡」

「はは、もうイキそうじゃん♡」

半分泣いているせいで潤む視界の中で、ギラギラとした金色が光る。

その濁った光に身体の中の何かがぐずぐずに溶けてしまいそうで、何かが怖くて、私はもっと泣きそうになった。その間にも三人は私を責めることをやめてくれなくて、いやらしい水音が身体を襲う刺激を相乗して、絶頂が近

づいてくる。

誰かの手に下瞼を優しくなげられると、視界がはつきりして、あらぬところから私を見ているグレンと目が合った。そこであの濁った光がグレンの瞳だったのだと気が付く。

「イけ」

ずぐん、とその声に身体を貫かれるような感覚がして。

低くかすれているのに、不思議と通る声だった。

「ひ、ア♡ンああ♡♡♡」

頭が真っ白になって、ピンと伸びた足先まで身体がびくんびくんと震える。

達してしまったのだと気がついたのは、体の震えがおさまってからだ。

「イツたな」

「ほんとかわいいなあ」

「はあ、は、も、もお、やあっ……」

「……もういいな」

「うあ、な、なにが、あっ……♡」

グレンが顔を離して低くつぶやくように言ったあと、私を上目遣いで見た。ガサガサだった唇がねとりと濡れているのが見ていられない。

「えー、グレンが先なの？」

「年功序列だ」

「むかつく」

フィンとアールは面白くなさそうに言って、私から離れた。

体に入力が入れられず素直に背中をベッドに預けると、いつものまにか服を脱いでいたグレンが再び私の両足を持ち上げて、私の上に覆い被さってくる。

恥ずかしながら、私はここでやっと、何をされるのか察した。

グレンが大きすぎるそれを大事なところにぴたりと当

てた。それだけで身体がゾクゾクしてしまふけれど、それは人と違う形にサイズで、怯えの方が勝る。

「まって……………！」

「挿れるぞ」

「む、むりっ……………」

「無理じゃない」

「そんなの、はいんないっ……………！」

「入る」

「はいんないいっ……………」

「かわいく、泣いちゃった♡」

「……………ほら。入る」

「あ！ ひ、あ、やあつ……！」

先端が私の濡れそぼった裂け目に無理矢理ぐちゅと押し当てられて、私は泣きながらグレンの熱い胸板を必死で押しした。

横にずれていたフィンがちゅ♡ちゅ♡と目元にキスを落としてくるが、グレンはフィンの襟首を掴んで退かすので（フィンが舌打ちしたような気がしたが、頭がぐちゃぐちやなので多分気のせいだ）、私の視界はガラガラとした目をするグレンで埋め尽くされた。

狼人に人間の女の腕力で敵うはずもなく、グレンは私の足を抱えたまま、身体を埋めてくる。

訪れる圧迫感に、頭が真っ白になった。

「ひ！」

ぬぢ♡ ぬぢ♡ といやらしい音を立てながら大きく硬いものが入り込んできて、息が詰まる。

「息をしろ」

「ひ、あっ！」

「メリーナ」

低く掠れた声に、背中がぞくりと粟立った。

その瞬間、顎が掴まれ太い指が口をこじ開けるように入ってきて、舌の中央をぐりと押す。

続

狼三兄弟にノンストップ溺愛はら
まセックスされて番にされる話__
体験版

2021年9月4日発行

♡どん丸／がら堂

♡Twitter：@donmar18